

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成24年7月号

平成二十四年七月一日発行 第二十二号(巻第七号) 読者誌三三三三号(毎月一回一日発行)  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# 桜守

高橋将夫

野山焼く火にも助走のありにけり

山焼の山の心の静かなり

春愁にゆるむことなき弓の弦

春の蚊の羽音かすかに夢幻能

白味噌に春の光を和へにけり  
やすらぎは空の古巢の中にあり  
永日のにぎわつてゐる秘境かな  
残雪のぐるり乾いてをりにけり  
さう言へば大蒜も好き  
蕪も好き  
大田螺すでに人生達観す  
桜守花に酔ふことなかりけり

## 槐賞

明け易し夢の逃げゆく窓明り

熊川 暁子

落蟬の草葬となる草のなか

躑躅燃ゆガラシャも淀も火の中へ

しんにようを青龍のごと初硯

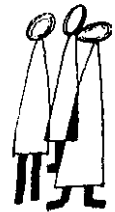
# 槐安集

水野恒彦

光るもの落して白鳥帰りけり  
一鳥の腋昏く翔つ芽木の山  
茅花野や若きに読みし書をひらく  
八十八夜海の昏さの父の部屋  
春の闇は大き洞うづらかもしれぬ

延広禎一

弓弦の音ありにけり北開く  
良うしろに赤き大根の種を蒔く  
花守の影むらさきに濡れぬたり  
宮遷うつしとはお色直しよ雉子鳴けり  
薰風を纏うてゐたる奪衣婆



加藤みき

遅き日の敦盛塚にロツクの音  
わたつみも花また花も眼下なり  
春昼の潮の目くきと彼方まで  
大響き春の埃の耳の中  
夏蓬まだまだ足は達者なり

石脇みはる

春寒や頭を刺激してゐたり  
鉄線の蔓のびやかに花芽もつ  
磯道に走り雨あり帰る雁  
里びとの心ひとつに法然忌  
旅のをはりは御幸通りのさくらかな

中島陽華

巢立ち鳥安部公房の本買うて  
生葉の効き目確かに貝櫓  
赤熊消えたり方形の春どつと  
ちりとてちんつらつら椿赤熊丸まげを含まず毛となりにけり  
清明やゆつたり本を読んでをり

竹内悦子

雛の日の曾孫の胞衣えなぎも着紅みの襟  
バス停の大き芥箱すみれ草  
木蓮ぼくれんや甲骨文字の話など  
池の面の逆さ桜に亀の来て  
花見酒のばしてゐたる鼻の下

栗栖恵通子

まん中に大日居ます花の昼  
花腐し軽く一枚羽織をり  
曼陀羅の佛数へて春眠し  
亀鳴くや生命線を描き足して  
フェルメールの青加へをり蝶の夢

大島翠木

太陽を白毫として耕せり  
竜の眼の天井に鳴く万愚節  
布かけて鏡ねむらす竹の秋  
春愁やさつと隠せし亀の首  
告げざりし事や沈丁強き香に

雨村敏子

星<sup>懐様</sup>の数魂の数彼岸潮

歓喜天の横に胞衣塚かぎろへる  
かんばせは聖者のごとし初桜  
糸り善の「り」の字の景色春夕べ  
桜夜の玄奘の空あかしあかし

近藤喜子

切株に浮力の少し藁ゆる  
朧夜の舟ちちははの乗つてゐる  
咲くやうな春の帽子でありにけり  
あの少年と少女この桜貝  
春愁や人の体は水と塩

本多俊子

ユトリロの白匂ひ立つ春寒し  
遠景に半仙戯ある別れかな  
またたけば楠の洞より龍天に  
踏青や昼の深さの水の音  
たましひの染まるまで藤棚にをり

谷村幸子

法螺の音や心静かに甘茶飲む  
花満開真澄の空を鳩とべり  
だれかれに名を聞かれをる貝母かな  
立ちつくす小雨の中の座禅草  
空青し命みじかし花は葉に

瀬川公馨

卒業の目腐れ金とマツチ箱  
風穴につつと入りたる櫻かな  
つらつら椿もつと南の育ちなり  
食つてやる屈の色と形かな  
春霰や乾びきつたる粕食ふべ

久保東海司

風の鳩鳴おびやかす何もなし  
日のかげり忽ち冷ゆる梅の空  
笹鳴きや嵯峨野に多き道しるべ  
白魚の小さき命小さな目  
吹く風も紫にして藤の花

西村純太

囀りや念佛堂に忘じをり  
花冷の祭り終へたる獅子頭  
亀鳴くやゆるる瓔珞ちぎり棄つ  
青き踏む天使ミカエル地にありて  
「貧」といふ字の歩みくる啄木忌

中野京子

地虫出づ鳥のあゆみのリズムミカル  
浮雲や夫の指さすげんげん田  
ひとりにはひとりの光うらけし  
老若は同じ線上さくら咲く  
私がつどる私しやぼん玉

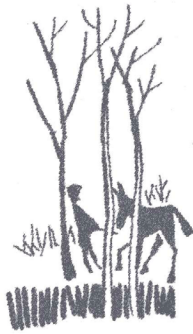


柳川 晋

人間の骨に火の性さくらかな  
本願は世世に新あらたし弥陀桜  
さくらさくら虚空に触るる阿闍梨の手  
唇に触れたときから紙風船  
乗つ込みや大阪城を揺るがせる

岩下 芳子

落合ひの川のいづれも蝻の道  
陽炎の遊戯三昧となりにけり  
春水の辿り着きたる茅渟の海  
春風やみづらに結ひし太子像  
悩みなど無しといへども春の闇



# 槐市集

桑原逸子

うぐひすや吾に親しき笑まふ嬰  
大き夢小さき夢やしやぼん玉  
デザートはムースなりけり春の宵  
花の雨おもちやの電車動き出す  
花の雨千両役者の有情かな

後藤マツエ

ものの怪に憑かれて竦む五月闇  
花の夜や一門の靈島による  
一本桜咲きてより山和らげり  
春の雨心の刺を溶かしけり  
臨月の娘に春光の集まれり

近藤紀子

落花追ふ二の鳥居まで小走りに  
立砂に花の吹雪や上賀茂社  
北窓開け居らぬ人らに呼びかくる  
フジコ弾くら・カンパネラや春愁  
「たとへば君」の相聞歌重し春深し

柴田靖子

ほろほろと消え楠若葉萌え出ずる  
あせらずにゆるりと我が道蝸牛  
密やかにされど華やきいぬふぐり  
神の手のうち今日春遠ざかり  
違ふことなく天に向ひ牡丹の芽



# 槐集

## 高橋将夫選

シヤガールの驢馬の蹠音春を告ぐ 京都 竹中 一花

光る風切りし剣か伐折羅神

天上に松の風ある智恵詣

春灯枢は人を引き寄する

春雷や十二神将かつと立つ

阿の口を通り抜けたる花吹雪 喜屋川 前田美恵子

心底を探られてをり嫁菜飯

草餅や村にありたる染工房

天蓋のしだれ桜にかけ入りぬ

春の土盛り上げてをるシヨベルカー

臘梅梅の一種やいまも喪ごころありにける 枚方 谷岡 尚美

高僧のごとき物言ひ桜守

散るさくら奈落と知りて落ちゆくか

絶妙の傾きに咲く山桜

天上の声を伝へむ揚雲雀

芹を摘むこはれさうなる地球から 枚方 熊川 暁子

葦牙や少年の吹く春の息

さくらの夜をんなの仮面剥がれさう

亀鳴いて雨の匂ひを連れて来し

花の昼どくろに酒を注ぐをとこ

落椿遊戯の器に拾はむと 近藤 紀子

雪割草くれて転勤告げてをり

音たてず春の日傘をたたみけり

埒長し総身に受くや花の風

喫茶去の字体のどけし茶甘し

精霊の水に触れたる四月かな 岡崎 岩月優美子

青き闇より一本の糸ざくら

花の山天上界を照らすなり

花馬酔木夕べ泉声高まれり

何となく地球儀廻す春愁ひ

# 銀河往来

高橋将夫

花の山 天上界を照らすなり 岩月優美子  
全山の桜が満開の花の山の景であるが、「天上界を照らす」の措辞が痛快。

## ◇「槐集」観照

春灯 柩は人を引き寄する 竹中 一花  
春灯のもとで人々が柩を囲み最後の別れを惜しんでいる。まるで柩に引き寄せられるかのように、人々が次々に柩の周りに集まって来るのだ。

阿の口を通り抜けたる花吹雪 前田美恵子  
阿の口といえば金剛力士や狛犬の口が思い浮かぶ。しかし、それ以上の何かがこの句にはある。阿は梵語の第一字母。

高僧のごとき物言ひ 柩守 谷岡 尚美  
長年にわたり柩の世話をしていると、仏道の修行をしなくても、自ずと仏様のようになってくるらしい。

芹を摘むこはれさうなる地球から 熊川 暁子  
自然の崩壊、地球の危機がよく問題にされる。時事問題が「芹を摘む」の季語で一句として成立した。

落椿 遊戯の器に拾はむと 近藤 紀子  
落椿を器に拾うわけだが、その器が遊戯の器だというから興味深い。落椿が浮かれて踊り出すかもしれない。

行く道の知らぬが仏さくらかな 中田 禎子  
行く先を知らぬ道。桜だけに、華やかさと、はかなさの予感。いずれにせよ、人生、先が見えてしまおうとつまらない。

大空の詩を高らかに揚雲雀 寺田すず江  
大空に鳴く揚雲雀が実におおらかに詠まれている。作者の心そのままと思う。

養花天黄泉平坂まで煙る 犬塚李里子  
養花天は桜の咲くころの曇天。黄泉平坂は現世と黄泉の境にある坂。うっかりすると花曇りの黄泉平坂を越えてしまえそう。

たましひの昼をゆらして大蚯蚓 犬塚 芳子  
一寸の虫にも五分の魂。大蚯蚓で昼がゆれる感覚に共振。

春炬燵あると幸せ 吾子の言ふ 江島 照美  
早春に、「炬燵があると幸せだね」と幼子が言ったという。おしゃまなところはどうかやら作者似らしい。

ブロンズに命吹き込み春の風 柴田 靖子  
春風に命を吹き込まれたかのように、ブロンズ像が生き生きとして見える。

(以下略)